

北拉致「救う会」世代交代

解散危機越え 30〜60代 新役員に

北朝鮮による拉致被害者とその家族らを支援する「救う会・群馬 群馬ボランティアの会」が解散の危機を乗り越え、新たなスタートを切った。発足から約14年間、運営を担ってきた代表の大野トシ江さん(83)、事務局長の敏雄さん(80)夫妻の思いを受け継ぎ、30〜60歳の会員が役員となり、活動を継続する。10月1、2日に前橋市内で、新体制となって初の署名と募金活動を行う。



雨宮さん(右)ら新しい役員に引き継ぎを行う大野トシ江さん(左)と敏雄さん(中央)(9月29日、前橋市で)

代表・大野夫妻の思い継ぐ

同会は2002年12月、トシ江さんの呼びかけで設立された。同年9月に小泉首相(当時)が訪朝。初めて開かれた日朝首脳会談で、北朝鮮側が拉致を認めたとを受けて、13歳で拉致された横田めぐみさんの救出に向けて活動を始めた。翌03年1月、前橋市の「スズラン百貨店前橋店」前で署名活動を実施。めぐみさんの母・早紀江さん(80)、父・滋さん(83)も駆け付け、2300人を超える署名が集まった。横田さん夫妻は仕事の関係で1988年から約3年間、前橋市で暮らしていた。トシ江さんは、通っていた教会で早紀江さんと知り合い、早紀江さんが前橋を離れた後も親しくしていた。同会を設立したのも「何とか早紀江さんの力に

なりたい」との思いからだった。その後も事務局長の敏雄さんが中心となり、拉致被害者を招いた講演会や募金活動を続けてきた。これまでに集めた署名は累計7万3000人に上り、募金は総額1900万円に達した。会員は約260人いる。

だが、運営に携わる役員は10人前後で、近年は高齢化が進んでいる。設立当初からの役員が他界したり、高齢を理由に退会が相次いだりした。昨年11月、渋川市で開かれた拉致被害者の講演会の最中、敏雄さんが体調不良で倒れた。命に別条はなかったが、トシ江さんも心臓に持病があり、2人とも将来に不安を抱いた。

「もう活動を続けられない」。敏雄さんは今年7月、早紀江さんに電話で伝えた。早紀江さんからは「長い間、良くやってくれました。た」とねぎらいの言葉をかけられたが、「電話の向こう側で、悲しい顔をしていただのではないか。本当に無念だった」という。その数日後、同会の運営を長年手伝ってきた雨宮留香さん(53)ら10人ほどの会員が、「活動を引き継ぎたい」と申し出た。8月の幹事会で、このうち7人が役員に加わった。幹事に就いた雨宮さんは「大野さん夫妻の熱心な姿を間近で見えてきた。拉致問題が解決していないのに、ここで終わらせるわけにはいかないと考えた」と語る。10月1、2日の署名・募金活動は、「収獲感謝祭」が開かれる前橋市亀里町のJAビルで午前10時〜午後2時に行つた。大野さん夫妻は「長い戦いになるかもしれないが、めぐみさんが帰ってくる瞬間に立ち会いたい。自分たちもできる範囲で活動を支援したい」としている。